

2022年6月26日（日）「今なぜ黙示録を学び始めるか」

ヨハネの黙示録 1:1-3

1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストに与え、それをキリストが天使を送って僕ヨハネに知らせたものである。2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてを証した。3 この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて中に記されたことを守る者たちは、幸いだ。時が迫っているからである。

#### 【序論】

本年度も、ビサイドチャーチ東京の皆様と共に礼拝を守れることを感謝いたします。オンラインでご視聴くださっている皆様も、心から歓迎いたします。このように、教会間の交流が続けられていること、共に御言葉に耳を傾けられることを大変嬉しく思っております。

さて、昨年はガラテヤ書の講解説教を始める前段階として、安海和宣先生のご協力を得てスキット入りのメッセージをさせていただきました。私の人生において、希少な経験であり、楽しい時でもありました。もし「見ていない」という方がおられましたら、2021年8月15日の礼拝動画が残っていますので、当教会のホームページの「礼拝の動画配信」というページをご確認いただければ幸いです。その後、9月からガラテヤ書の説教を続けてまいりましたが、それももうすぐ終わりますので、次の書を考え始めているところです。今心に示されてきているのは、ヨハネの黙示録の講解です。非常に難しい書なので、私の人生計画では、おそらく一生避けて通るだろうなと思っておりましたが、昨今の異常な世界の動きや、それに乗じて現れる特異な聖書解釈を聞くにつけ、福音を信じる者たちが何を信じたらよいか分からない状態に陥る危険性を感じ、学びを始めることにしました。このような時代に気をつけなくてはならないのは、偽預言者が多く世に出てくることであり、逸脱した聖書解釈によって世の終わりの日を特定しようとしたり、旧約預言と現在の状況とを極端に結びつけようとする傾向です。実際、一般の世界でも「エゼキエル戦争」「ハルマゲドンの戦い」という言葉がよく聞かれるようになり、それが本当にそうなのか、そうでないのかの見極めも必要な時代になってきました。ただ、一つははっきりと言えることはあります。現在、世界が未曾有の危機へ向かっていることは確かであり、特に平和ボケしてきてしまった私たち日本人は本当に目を覚まして現実を見なくてはなりません。「時が迫っている」からです。

## 【本論】

黙示録の講解を始めるに先立ち、聖書宣教会の岡山英雄先生が書かれた『小羊の王国』という本を読んで下準備をしてみました。実は先日、岡山先生に直接連絡を取って、本を引用させていただきたいとお願いしたところでもあります。ご快諾いただけましたので、惜しみなくこの本から皆様にご内容を伝えることができます。早速ですが、本書では黙示録の構造が大きく4つのポイントでまとめられています。

### 第1章 麦と毒麦

### 第2章 小羊の王国

### 第3章 獣の王国

### 第4章 新しい天と地

今日はこの本から引用しつつ、黙示録の全体像をお伝えしたいと思います。

#### 本論1. 麦と毒麦

「21世紀、私たちはどこへ向かっているのだろうか。20世紀は、科学と西洋文明がかつてない幸福を人類にもたらすという幻想とともに明けたが、100年の『死と暴力』の時代を経て（※二つの世界大戦）、そのような楽観論は後退した。新しい世紀は、世界に衝撃を与えた激しい暴力的事件とともに始まり（※9.11）、人間が自律的な『理性』によって打ち立てた『文明』は、その根底から揺り動かされている。現代社会は進むべき方向性を見失い、多様化する価値観の中で、欲望だけが肥大化している。このような中で私たちは、主の来臨に至る歴史の最終段階に関して、大きな、そしてはっきりとした見通しを持つべきである。」  
(p. 16)

終末の時代は、2000年前の主イエスの初臨とともに始まったと私たちは理解しています。アダム以来サタンの支配下に置かれてきた世界に、火の玉のごとく神の国が飛び込んできました。それが主イエスの誕生という出来事であり、主イエスのことばと御業は、暴力でもって暴力を制する世界に対し、一貫した平和でもって憎しみに打ち克つ道を切り開きました。悪に対して悪をもって報いず、十字架に至る神への従順と罪の赦しによって憎しみの連鎖を断ち切るという、神の国の圧倒的な支配をもたらされたのです。この神の国の支配の完成（新天新地）を目指し、現在の終末の時代は進んでいます。

しかしながら、この世界に蔓延<sup>はびこ</sup>る悪の力は強く、神の国の支配に激しく抵抗していてもいます。現在は神の国とサタンの国が同時に進行しており、この状態を本書では「麦と毒麦」という表現で言い表しています（これは主イエスが話された譬話から取られています）。

「刈り取りの日まで、『麦』に象徴される神の国の光が輝き続けるとともに、『毒麦』に象徴される悪の暗黒も深まっていく。収穫の日まで、両者は勢力を拡大し、互いの葛藤は激しさを増し、やがてその頂点に至る。」(p. 35)

世の終わりの大患難時代に教会が苦難に遭うかどうかという問題については、患難期、千年王国、携挙という事柄をどう理解するかによって立場が分かれてきます。この点については、講解説教の中で丁寧にお話する予定ですが、過去の歴史を見ても、教会はあらゆる時代に苦難を経験してきているという事実があります。最終的な大患難の時代も同様であろうというのが、ここでひとまずお伝えできることです。

## 本論 2. 小羊の王国

第2章では、「小羊の国」と「獣の国」の対比がなされています。

「天では神の『恵み』が完全に成就し、賛美と歓喜が満ちている。この天の国は『小羊』を中心とする四者（①神 ②小羊 ③聖霊 ④新しいエルサレム）によって形成されている。これに対し、地上では悪の活動が許され、偽りの『恵み』によって人々を惑わす闇の王国は、『獣』を中心とする四者（①サタン ②獣 ③にせ預言者 ④大バビロン）から成る。」(p. 80)

黙示録を読んでいると、いつの時代のことが語られているのかが分かりにくい印象を持たれることが多いと思います。これは、旧約預言書を読んでいるときに感じることと同様であり、ある出来事の向こう側にもう一つ、二つの出来事が重なって映っていることがある。このことを理解するうえで必要なのは、過去・現在・未来を同時的に見ていく視点です。小羊の王国は永遠不変であるのに対し、獣の国は本質を同じくしながらそれぞれの時代に形を変えて現れるという特徴があります。

「すなわち『獣の国』が象徴しているのは、一世紀のローマ帝国であるとともに、世界史の中でたびたび現れた自己神格化した国家でもあり、また来臨直前の大きな苦難の時代（「三年半」）に出現する、世界的な暗黒の帝国でもある。（※今樹立つつある世界統一政府？）

黙示録が書かれたのは、一世紀末、強大なローマ帝国においてその富によって惑わされている人々に警告を発し、その支配によって苦しめられている神の民を励ますためであり、またすべての時代の神の民を奮い立たせ、来臨直前の全世界的な苦難の時代に向かって、民を備え、整えるためである。」(p. 82-83)

この「過去・現在・未来」の視点に立って読んでいきますと、2～3章において小羊イエスが7つの教会に対するメッセージを語っておられる意味が理解できてきます。第一世紀の教会の中にも光と闇が混在し、様々な偽りの教えが入り込み、教会内で不品行が蔓延<sup>はびこ</sup>っていました。これはすなわち、教会内にも「小羊の王国」と「獣の王国」の戦いが存在することを意味し、更にミクロな見方をするならば、私たち信者の心の中での戦いとも言えるのです。第一世紀の7つの教会は、全歴史を通じたキリスト教会の代表であり、同質の問題が現代にも形を変えて現れることを示しているようです。

しかしながら、黙示録は一貫して「小羊の勝利」を語っており、主イエスが礼拝され、審きを行ない、牧者となり、永遠の王権を確立されることを明らかにしています。

黙示録には、象徴的な数字が多く出てきますが、四つの邪悪な幻（竜、獣、偽預言者、大バビロン）が活動する終末的期間が「1260日」「42か月」「一時と二時と半時の間」「三年半」と言い換えられています。これは、キリストが再臨される直前の神の民の苦難を象徴する期間と理解されています。

「神の民の終末的苦難の期間としての『三年半』とは、いつのことなのだろうか。それは『すでに』過ぎ去ったのか、『いま』来ているのか、それとも『やがて』来るのだろうか。」(p. 111)

この「三年半」は、過去・現在・未来すべてと関わっており、時代ごとに何らかの形でキリスト（神の国）の勝利がもたらされるということでしょう。しかし、究極的な勝利は本当の世の終わりまで待たなくてはなりません。

### 本論3. 獣の王国

黙示録12～13章、17～18章には、「獣の国」を構成する悪の四つの幻（竜、獣、偽預言者、大バビロン）が出てきます。黙示録において、サタンは「大きな赤い竜」として登場します。竜は、一人の女から生まれた男の子（キリスト）を食い尽くそうとしますが、失敗に終わります。その後、竜は「女の子孫の残りの者」（イエスの証を保っている者たち）を攻

撃します。

竜の手下である獣は、先にも申しましたように、第一世紀にはローマ帝国という形で登場した大帝国、その後の歴史においても様々な形で獣化した国家として現れました。

「終末の時代には、『獣』化の頂点として、地球的な規模の巨大な帝国が出現するであろう（※グローバリズム）。このような世界帝国の出現は、今世紀になって現実性を帯びてきている。経済活動においては、超巨大多国籍企業（※グローバル企業）が国境を超えて資本を自由に移動させ、地球規模の経済帝国を築き上げている。また通信衛星などの情報伝達の急激な発達により、全世界は瞬時に結びつけられ、インターネットの急速な普及は、15世紀グーテンベルクの活版印刷術以来、最大の情報革命であり、世界を劇的に変えつつある。世界の歴史はかつてない新しい局面を迎え、すでにその最終的な段階に達しつつあり、黙示録的な究極の世界が、今まさに現れようとしている。」(p. 132)

ここでも言われているように、現在世界を動かしているのは国家を超える力であり、世界人口の1%の人々が全世界の富の82%を握っていると言われていています。この人々は兆ではなく京のお金を動かし、コロナショックを経てその富は更にこの人々の懐に流れ込んでいきます。今後貧富の差は更に拡大し、世界人口の0.1%の人々がほとんどの富を掌握するであろうと言われていています。更に、ほぼすべての人にスマホが普及したことで、巨大なグローバル企業は全世界の民の情報を取得しつつあります。私たちが興味関心を持っていること、どんな思想を持っているか、それはネットの検索履歴によってすべて知られている。100年に亘って築き上げられてきた金融システムは、富が一極集中する作りになっており、機関投資家同士がお互いの株を持ち合い、ビッグデータの収集が行なわれています。目指されているのは完全管理社会であり、昨今の流れから見てその日は目前に迫っているように思います。このような時代に生きるキリスト者は、これから先に何が起きてくるかを見極めていなくてはなりません。

四つの幻の一つとして偽預言者への警告が語られていますが、特に気をつけなくてはならないのは、苦難の時代には再臨の日を特定しようとする傾向が出やすいことでしょう。これは一種の「メシヤ熱」とも言えるのかもしれませんが、再臨が来るぞ来るぞと煽ることで、人々に現実を見えなくさせてしまう危険性があります。第二次大戦の時にも同じように叫ばれましたが、再臨はまだ来ませんでした。第三次世界大戦の時はどうでしょうか。いずれにせよ、主イエスご自身が何と言っておられるかが重要なのです。

その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。

(マタイ 24:36)

「大バビロン」というのは「その富と繁栄によって全世界を経済的、文化的に支配しつつ、地に住む人々を、道徳的な退廃へと誘い込む」(p. 151) 勢力です。

「この幻が象徴しているのは、一世紀のローマ帝国の、また地上のすべての繁栄した国家の物質的な豊かさと道徳的墮落、すなわちその経済的また倫理的な側面であり、さらには私たちの内に潜む自己中心的な物欲と肉欲である。」(p. 151)

ここでも、「大バビロン」というものが、様々なレベルにおいて現れるものであることが明らかにされています。超巨大金融資本だけでなく、教会内における金銭的偽り、自分の心の中の欲望までもがそれに該当してきます。黙示録はこのように、過去・現在・未来を常に同時的に見ている書なのです。

#### 本論 4. 新しい天と地

以上のように、「小羊の王国」と「獣の王国」の戦いは極まり、ついに主イエスの再臨に至ります。

「終末において『麦』と『毒麦』との葛藤、『小羊の王国』と『獣の王国』との戦いは激化していくが、やがて来臨の主によって『獣の国』は打ち倒され、『毒麦』は火の中に投げ込まれ、すべての悪は消滅し一切が新しくされ、神の栄光のみが輝きわたる。キリストの来臨によって救いが完成し、永遠の安息が与えられ、神の義が明らかにされる。」(p. 187)

この「終りの日」に起きることは、「からだの贖い」「万物の贖い」「永遠の安息」「(麦の)刈り取り」です。

##### ① からだの贖い

現在の私たちの痛みと病の多い体は真新しい栄光のからだに置き換えられ、「もはや死もなく、悲しみも嘆きも痛みもない」(黙示録 21:4) 永遠のいのちが与えられる。それでいて、私たちが地上で持っていた「自分」というアイデンティティとのつながりが損なわれるわけではなく、それが全く回復した形で本当の自分を知ることができるでしょう。

##### ② 万物の贖い

パウロが「被造物全体が今に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっている」と言っているように、この自然界も人の罪によって呻き苦しんでいます。環境汚染、放射能、遺伝子組換え食品や生物など…。科学の進歩がどこまでも自然界を苦しめる結果をもたらしている。このような世界の秩序が取り戻され、これらもまた栄光の姿に変えられる。

### ③ 永遠の安息

地上ではたくさんの労苦がありますが、キリストはその重荷を下ろさせ、安らぎと休息を与えてくださる。この究極の安息を目指して歩んでいる私たちは、その安息との連続上にある日曜日の礼拝を「安息日」として大切にしているのです。

### ④ (麦の)刈り取り

麦と毒麦の混じり合っていた時代は終わり、まことの麦だけが刈り取られ、天の倉に大切に納められます (マタイ 13:30)。そこに毒麦の残る余地はありません。

### 【結論】

以上のように、黙示録全体を概観してきましたが、本来ならば「千年王国」や「ハルマゲドン」の戦い、「ゴグとマゴグの戦い」なども扱っておかなくてはなりません。それらについては、講解説教の中で説明させていただく予定です。

最後に、私が現在の世界に対して抱いている危機感についてお話しさせていただきます。2020年に起きたコロナショックにより、これまでに築き上げられてきた価値観が根底から覆されてきているということは、誰もが認めるところでしょう。世界経済は大打撃を受け、多くの企業が倒産し、自殺者が急増しました。更に輪を掛けるように、今年に入ってウクライナ紛争が勃発し、その影響でロシアからのエネルギー資源の輸入の停止や、穀倉地帯であるウクライナからの小麦やトウモロコシの輸出も制限されるようになりました。現時点では20か国が輸出を止めている状態であり、日本国内でも原油価格、小麦関連の食材も高騰してきています。また、2020年8月に起きたレバノンの首都ベイルート港での大爆発によって巨大な穀物倉庫が失われ、市に備蓄されていた85%の穀物がなくなった事件。更に、アメリカのアイオワ州で起きた肥料を積んだ列車の脱線事故なども、追い討ちをかけるように世界の食糧不足を助長しています。肥料が入ってこなくなると、多くの農家が作物を育てられなくなってしまいます。現在日本の食糧自給率は僅か37%であり、各国から輸入できなくなると、国民は食べるものを求めて彷徨うことになるでしょう。それだけではありません。

インドネシアによるパーム油の輸出制限や、上海のロックダウンがもたらす影響も測り知れず、日本で使われている製品の多くがこれらの国を原産地としているため、これから私たちの日用品に至るまで、物資の供給が滞る可能性が高い。この未曾有の事態を私たちはしっかりと認識しなくてはなりません。これから世界で／国内で何が起きてくるのか、まさに「大患難」と呼ぶにふさわしい時代がやってきているのです。

私は今後、現在の社会の動きにもふれつつ、黙示録の講解を進めていこうと考えています。今がどういう時代なのかを読み解く力が必要であり、世界が最終的にどこへ向かっているのかを見極めていなくてはなりません。しかし、その先には希望があります。私たちがどんな時にも忘れてはならないことは、小羊イエスの勝利であり、彼は光であって、私たちも光の子とされているという事実、約束です。

**光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。**（ヨハネ 1:5）

最後に、教会として心に留めておきたい姿勢をまとめてみます。

- ① 今は麦と毒麦が混在している時代であることを認識し、
- ② 最終的な主の来臨によって世界が贖われることを信じ、
- ③ 現実から目を逸らすことなく、
- ④ 明日ではなく今日行動し、
- ⑤ 誰をも憎まず、恨まず、
- ⑥ 「マラナタ（主よ、来りませ）」と祈り続けたい。

#### 【祈り】

救い主イエス・キリストの父なる神様。今日も主にある皆様と共に御言葉に耳を傾けることができ、感謝いたします。過去にも困難な時代が繰り返されてきましたが、今また私たちが想像もしなかった出来事が次々と世界で起きてきています。私たちの目を覚まし、その日その日に何をなすべきかを教えてください。聖徒が心に持っている再臨の主への信仰に伝えてくださり、その日の訪れを遅らせないでください。今日は二教会が合同の礼拝を守りましたが、一人びとりの聖徒の心を聖霊によって結び合わせてくださいますように。



【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
悪の支配下にあった世に御子を派遣し、神の国の光を照り輝かせ給うた、父なる神の愛、  
最終的な贖いを実現するため、再び世に來り給う、主イエス・キリストの恵み、  
常に聖徒の靈の目を醒させ、与えられた人生の日々を精一杯主と共に歩ませ給う、聖靈の親  
しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。